新刊紹介

大倉比呂志著『風に紅葉考』
―百花繚乱する〈性〉への目差し―

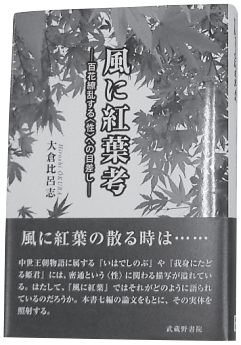
鈴木泰恵

王朝物語というと、あの『源氏物語』を生み出した平安時代のものだと、一般的には思われがちかもしれない。けれども、より多くの、そしてより刺激的な王朝的物語を輩出したのは、院政期以降の中世という時代であり、今日では「中世王朝物語」というジャンルとして認知されるようになった。それに伴い、このジャンルの研究も進められている。

とはいえ、それは平安期の王朝物語研究にくらべれば、ようやく研究の緒に就いた感を免れない。ましてや、そう大ぶりの物語でもない『風に紅葉』に焦点を絞った研究書が出るのは想定を超えた事態だ。しかし、王朝物語の掉尾を飾るこの物語を定点に、しかも「性」に着目して物語史を見渡す本書の試みは刺激的な提言に満ち、「物語」とは何かを考えさせる一書であった。そんな本書の価値と魅力、そこから導かれるはずの問題について、いささかなりとも示せればと思う。

まず本書の構成は以下のとおりである。

序
第一章〈性の博物館〉としての『風に紅葉』
第二章『風に紅葉』における男主人公大将を取り巻く人間たち
第三章『風に紅葉』における〈精進落とし〉の記事をめぐっての断章―『源氏物語』摂取の新たな技―
第四章『風に紅葉』と『恋路ゆかしき大将』との類似性をめぐって
第五章『風に紅葉』と『とはずがたり』との共通基盤―〈性の被管理者〉から〈性の管理者〉へ―
第六章『風に紅葉』拾遺
第七章『風に紅葉』続拾遺



2018年1月25日発行
武蔵野書院
四六判　192頁
定価　本体3000円＋税

「序」にも「〈性〉と〈いじめ〉の問題は看過できまい」とあるように、第一章でもそこに焦点が絞られ、多角的で新たな分析・解釈がなされている。とりわけ注目されるのは、異母姉に虐げられる故式部卿宮の姫君のように、わかりやすい事例だけではなく、帝が妻中宮と主人公大将との過ちを恐れ、徹底して大将の視線から中宮を遠ざけるところに、帝の大将に対する〈いじめ〉を読み、大将と他の皇妃（梅壺・承香殿両女御）との密通に、大将の〈報復〉を読んでいるところだ。『源氏物語』以降の王朝物語には、継子譚の型が様々に崩れ変形しながら散在するわけだが、密通の可能性を恐れる帝と主人公との関係―たしかに世代的には父子に当たる関係―に、断片化した継子譚を掬い取るところは鮮やかな手際である。ただ、であるがゆえに、その論証の大胆さは少し危うい。

また、〈性〉を横溢させる『風に紅葉』ではあるが、その横溢は従来の物語のごとく多く密通に拠っている。しかしそこには、〈性〉の贈与（提供）という事態が介在している次第を指摘する。そして、『風に紅葉』と『とはずがたり』との類同性に言及し、中世王朝文学の特質を照射しているところなど見事である。例えばピエール・ド・クロソウスキー『歓待の掟』（いわゆる「ロベルト三部作」）

との、古今東西を超えた共鳴に隠されたものは何なのかなどを考えさせられた。

第二章は『風に紅葉』の本質に迫ろうとする論考だ。まず、主人公大将を取り巻く女性たちが次々に喪失されていく様子をとらえ、大将はついに官職をも辞すという展開をもふまえ、『風に紅葉』を〈喪失〉の物語だと位置づける。そのうえで『浅茅が露』との影響関係に注意を促し、かつ『風に紅葉』の冒頭は平安後期物語以降に見られる主題提示型のそれであると指摘する。本章は、ポスト『源氏物語』としての中世王朝物語の一翼に、『風に紅葉』を位置づけようとするものだと言える。

第三章では「『源氏物語』の〈再生〉もしくは〈新生〉として『風に紅葉』を把握していく必要」が丹念に説かれている。具体的には、主人公大将が自身の妻一品宮を、甥であり男色の相手であり、しかも自身に瓜二つの若君に与えてしまうところに、『源氏』における光源氏息夕霧と、光源氏最愛の妻紫の上との、「可能態」にとどまった密通の物語の発展的変奏を読んでいるところ。あるいは、同『源氏』における光源氏次世代の柏木と、光源氏の若き正妻女三宮との密通は、『風に紅葉』の主人公大将が、故式部卿宮の姫君を、前述の若君に与える物語へと変奏されていると指摘しているところだ。見事なアナロジーである。が、妻を奪われる物語から妻を与える物語へと変奏されていく事情とは何か。気にかかるところだ。

第四章では先行する中古（平安）王朝物語との関係ばかりでなく、中世王朝物語との、とりわけ『風葉和歌集』以降のそれとの関係が問われるべきだとの提言がなされている。そして、中世王朝物語の一つ『恋路ゆかしき大将』との詳細な関係が跡づけられた。こうした研究を通して、王朝物語が中古から中世にかけて、いかなる変容を遂げたのかが見えてくるのだと思った。

第五章では『とはずがたり』との共通基盤についての提言がなされている。主人公大将は、当初〈性の被管理者〉であったが、異母兄の遺児若君との関係を通じて、〈性の管理者〉たるべく変貌していく。が、真に心を寄せた式部卿宮の姫君や、最愛の妻一品宮の喪失は、ついに「〈性の管理者〉として完遂できなかった」大将を映し出す。上記の点を指摘し、それは『とはずがたり』に語られている後深草院と相似のものであるとし、そこに双方の類似性および同時代性を掬い取っている。

〈性の管理者〉とは何か。その政治性と遊戯性とに論及している点はまことに興味深く、それらを統合する論理に、さらに耳を傾けたいと思った。

第六章、第七章では、ある読みを証し立てる論述にはいまだ収斂されないが、先行文学との関係を濃厚に漂わす言説に目を凝らし、鋭利な読み筋を示している。こうした指摘から新たな論が組み立てられていくのだと確信させられるパートだ。

総じて本書は警抜な指摘に満ち満ちている。そもそも、あまりにもまっとうなはずでありながら、どうしても忌避されがちであった「性」に焦点を絞った論考であるところから、それは必然的に導かれた結果であるだろう。けれども、さらに加えて言うなら、ときに緻密な筋道を立てていては、いつの間にか見失ってしまう何かを摑み取らんと、あえて飛躍を辞せず提示する読み筋は、警抜であるとともに、きわめて魅力的である。ただ、その分、危うさもはらんでいる。そのように読めてしまう感覚を共有できなければ、どうしてそう読めるのかの根拠がいささか見えづらく、読みを共有できない場合も出来するからだ。

本書は、逐一論証しなければわからない読者を尻目に、いわばあえて火中の栗を拾い、性と文学との本質な関係に迫ろうとした、きわめて意欲的な研究書だと位置づけうる。王朝物語に興味を持つ者、ましてやそれを研究する者にとっては、必読の一書である。

（すずき　やすえ　東海大学特任教授）